
Memories

零/Rey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Memories

【Nコード】

N2000BA

【作者名】

零/Rey

【あらすじ】

NEVERとして生き返ると過去が消えていく…克己と賢の過去の消え方は全く違う消え方をしていることに気がついた京水は賢の過去を探ろうとして…

仮面ライダーエターナルで垣間見ることが出来た賢の過去をねつ造して書いてます。このSSは別漢字のHNで運営しているサイトにも掲載予定です。

Blues harp

京水がアジトの廊下を歩いている時、ブルースハープの音色が何処からかすかに聞こえてきた。誰が吹いているんだろう、と思った彼は、音のする方に向かって歩いて行った。

月明かりの下、窓のふちに腰かけているシルエットからその音色が聞こえているため、京水は早足でその場所に移動した。近づくにつれて、そのシルエットの人物がだれか、というのがわかった彼は、相手のイメージから少し意外な印象を受け、そのまま立ち止まると、相手が曲を吹き終わるのを待っていた。相手は、そんな京水の行動に気がついていないのかいなのか、そのままの姿勢で曲を吹き終えた。相手の口からすつとブルースハープが離されたのを見た京水は、いつものハイテンションとは違い、少し落ち着いた口調で話しかけた。

「克己ちゃんにこんな特技があつたなんてアタシビックリよ……」

「…俺に似合わないか？」

克己は京水の方を見てそう言ったが、逆光の為、彼の表情は京水にはよく見えなかった。それでも、なんとなく、克己が自嘲しているような気がして、京水はあわててフォローの為に口を開いた。

「克己ちゃんにすごく似合っている、ううん、演奏している行為自体が自然と言つても過言じゃないわ！で、その曲すごく良かったから又聞きたいんだけど、曲名とか知ってる？」

「…さあな……」

「…え…？」

意地悪ではなく、本当に知らない雰囲気ですぐ答えた克己に、京水は疑問を抱いてじつと彼を見つめていた。耳コピーでちよつと弾き齧つたレベルではなく、完全に自分の持ち曲として弾いているのには知らない、というのはどういうことなのだろうか…そんな疑問を乗せた視線が向けられているのに気がついたのか、克己は窓の外に遠い

目を向けながら答えた。

「NEVERになると過去が消えていくからな…だが、体が覚えて
いることは自然にこなせる…だから、この曲の弾き方は体が覚えて
いるから弾けるが、曲名とか、この曲をやるうと思っただ経緯とい
うのがすっぱりと抜けているというのが今の状態さ…」

彼の言葉に京水は思わず生唾を飲み込んだ。一度死んだ体が生き
返って永遠の命をもらったと思っただが、支払わなければいけない代
償は思っただよりも大きいらしい…京水は思わず不安を声に載せてし
まった。

「過去が消えていくって…法則性とか、順番とかあるの…？」

克己は京水の方を見てふっと淡い笑みを浮かべると淡々とした口
調で答えた。

「それは誰にもわからない、が真実だな…俺をネクロオーバーにし
た張本人のプロフェッサー・マリアでさえも、だ。ただ、俺の感覚
では今の自分に必要ないものから忘れていつている感じだな…」

それを聞いた途端、京水は少しほっとしたような表情を浮かべて
彼に向かって明るいう声で言った。

「今の自分に必要ないものから忘れていくのなら、生前と大差ない
わね。だったらアタシは関係ないわ…昔から過去のことよりもリア
ルタイムのことが重要、として生きてきたんだもの。そして、今の
アタシの中では、克己ちゃんに惚れているからこそ、みんなの中で
一番克己ちゃんの役に立つにはどうしたらいいのか、ってことが大
切なんだもの」

「…そうか…」

克己はそういうと、再びブルースハープに口をつけて曲を奏で始
めた。先ほどと同じメロディの曲を吹く克己からは、一人にしてお
いてくれ、と言わんばかりの空気を感じた京水は、そっと音をたて
ないようにしてその場から離れた。

しばらく廊下を歩いていたら京水は、前方を歩いている賢の姿を見かけた。指示が無い限り、じつと自分の部屋にすることが多い彼にしては珍しい行動に、どこに行くのだろう、と興味がわいた京水は後を追った。賢はそんな背後の動きを気にすることなく、廊下を歩くと、とある部屋のドアを開け、中に入ってしまった。素早くその場所に行った京水はドアのプレートを見て、思わず首をかしげた。

「プロフェッサー・マリアの部屋…？賢ちゃんが彼女に用があるのかしら…それとも彼女から直々に賢ちゃんを呼び出したのかしら…どっちにしろ珍しいことがあるものね…どんな用かちょっと興味があるわ」

世話好きの裏返しである好奇心をすごく掻き立てられた京水は、気配を消すと、音をたてないようにうつすらと部屋のドアを開け、聞き耳を立てた。その時、賢の低い声でなにかぼそぼそ言ったことに対して、マリアの驚きの声が飛び込んできた。

「一体どういうことなの！賢、その言葉本気で言っているの！」
それに対して、賢は再び何かを言ったが、それは京水の耳には何を言ったのか聞き取ることはできなかった。それに対して、マリアは絶句しているようで、彼女から何も言葉が発せられることはなかった。

賢がマリアに対して反論している、イコール克己に対して逆らうような意思表示でもしたのか、と京水は不安になり、偶然通りかかったように装いながらドアを叩いて自分も彼女たちの会話に加わるべく声をかけた。

「一体どうしたの？プロフェッサー・マリア：アタシがここ通りかかったら大声が聞こえたもので思わず入ってきちゃったんだけど」
京水の言葉にマリアはドアの方を振り返り、困惑した表情を見せた。それとは対照的に、賢は無表情のまま、京水の方を振り向こう

とはせず、じつとマリアに視線を向けているだけだった。

「京水…」

どういえばいいのか、と言わんばかりに言葉を濁したマリアに対し、賢は、用が終わったら自分がここにいる意味はない、と言わんばかりにマリアに対して頭を下げると、そのまま京水の横を彼に視線を向けることなく通り抜けて部屋を出ていった。

「…あ…アタシが入ってきて逆にまずいことになっちゃったかしら…」

マリアの困惑した表情が伝染したような表情のまま京水はマリアに詫びた。マリアは首を横に振ると、右手に握っていた写真に視線を向け、深いため息をついた。それが気になった京水は、彼女のそばに近寄ると写真に目を向けたまま問いかけた。

「その写真がプロフィール・マリアが声を荒げる原因になった代物？アタシがNEVERの副隊長として賢ちゃんに話つけてきた方がいい？」

自分の言動が京水に気を遣わせている、むしろ、NEVERチームに対する災いを示唆させていると感じたマリアは、深いため息とともに、自分が持っていた写真を京水に向けて口を開いた。

「これは…克己が賢を見つけた時、死してなお握りしめたままだった写真よ…克己から話を聞いたとき、これは賢にとって大事だった人たちだったのでは、と思って血糊を落として復元したの…」

彼女が示した写真にはほほえみを浮かべた若い女性が笑っている男の子をだっこしている姿が映し出されていた。ぱつと見た瞬間、生前の賢の家族だったのかな、と思わせられる写真だった。何故、この写真を見せたことがマリアの声を荒げさせる原因になるのか、というのが結びつかず、京水はマリアが続きを説明してくれるのを待った。その空気を感じ取ったマリアは、ため息とともに、先ほどの状況を説明した。

「さっき賢がここに来た理由と言うのは、この写真が復元できたから彼に返してあげようと思って呼び出したからなの…NEVERに

なつた瞬間、生前の記憶がすべてリセットされるわけじゃく、生きていた時となんら変わらず記憶や感情を持ち続けているはずだから、生前に大事だったものだったら、今も大事だったんじゃないかと思つて…けど…賢は…」

そこでマリアはいったん会話を切ると、写真に視線を向け、戸惑いの表情のまま話を続けた。

「この写真を見た瞬間、何の感情もこもらない目で、次の仕事のターゲットなのか、と聞いてきたのよ…そして、私の驚きの声に対して、ターゲットでなければ、知らない人間の写真を俺に見せて一体どうしろと？、と言つたの…その言葉を言つた時の賢の眼は、あえて知らないふりをして隠している、じゃなくて本当に赤の他人に対する視線だつたわ…その時に貴方が声をかけてきたのよ」

それを聞いて、京水の脳裏に再び嫌な考えがよぎつた。克己は過去が消えていく順番は、今自分に必要ないものからだ、と言つていて、彼を見る限りはそうなんだろう、と思えたが、マリアと賢のやり取りは、逆に重要な過去から消していくようなイメージを受けたからだつた。自分たちはみんな死ぬ間際に克己が手を差し伸べてくれたことでNEVERになつた。そして、京水の中で第一印象の克己は惚れるに値する存在であり、なおかつ救世主でもあつた。その第一印象があつたからこそ、NEVERになつてから目にする克己の一挙一動にさらに惚れていく、という状態になつているのを京水は頭の中で自覚していた。今の自分なら第一印象よりも今の方がもっと惚れているからいいが、賢の場合はどうなのか…もし仮に重要なことから過去は消えていく場合、死ぬ間際に克己が手を差し伸べてくれた過去が消えても彼にずっと忠誠を誓つてくれればいいが、そうでなかった時、彼に克己に対する信頼や忠誠というものを感じる根拠はなく、そうなるに克己を中心として結束しているチームとしての信頼関係が揺らぐというような問題点が浮上してくるのでは…

そう思つた瞬間、京水はマリアに自分の不安を消すための手段として、一つの提案を持ちかけた。

「プロフェッサー・マリア：もしよかったら、その写真から賢ちゃんの過去ちよつと調べてもらえないかしら…」

「…賢の過去…？一体何故…？」

京水が言い出した内容の意図がつかめず、マリアは疑いの目を彼に向けて逆に質問で返した。マリアの台詞と表情で、自分が言った内容に仲間を疑っているのでは、という不信感を持たれていると感じ取った京水は、その疑いを晴らすべく、そう申し出た意図を彼女に説明した。

「実はね…アタシ、さつき克己ちゃんからNEVERになったら過去が消えていく、って話を聞いたの…克己ちゃんいわく、過去が消えていく順番は今の自分に必要ないところからだ、ってことだけど、さつきの賢ちゃんの様子を見たら、逆に過去の自分にとって重要なところから消えていく、って見えちゃったの…だから、アタシはその不安を解消したいのよ…」

その言葉に、マリアは深いため息をついた。確かに、克己を見ると、過去の記憶が消えていつているようなのは傍から見ていると何となく判っていた。NEVERになる前は音楽家になりたいと言って作曲をしていたのに、生き返ってからは一切それをしようとはしなかった。財団Xの実験体として訓練とテストをしていた時代は無理かと思えても、そこから逃れて、自分たちNEVERだけになっても同様だった。ふと思いついたように、時折、ブルースハーブを吹いている姿を見かけたことはあるが、新しい曲を作っているのではなく、いつも同じ曲しか吹いていなかった。このことを克己に尋ねても、そつばを向かれて口を聞こうとはしなかった。その態度から、過去の記憶が抜けていつているのかな、と推測できてもそれ以上は突っ込むことはできなかった。

なにしろ、死者を生き返らせる死亡確定個体複還術処置の第一号は克己であり、この技術の効果、副作用等は彼からしかデータは得られず、それも、一部の事項に関してには彼から言葉に出してもらわないと判らないことも多かった。それを必死にまとめながらも半ば

見切り発車のようにこの技術を克己の要求に応じるように他の面々に使っていった。同じ死亡確定個体複製還術処置をされた克己と賢で全然違う態度を見せられて、当然同じ技術を施された京水が不安に感じるのも仕方なく、自分もその不安を解消できるようなデータは今の地点で持ち合わせていなかった。となると、京水の不安を解くべく、彼の要求に従うことは、彼に対する誠意のあかしだと思えた。マリアは京水に向かって写真を差し出しながら彼に言った。

「この写真から過去の賢のことは調べて連絡するわ。そして、その時にあなたの不安を解消するための手がかりとして、賢がここに運ばれてきたときの状況も説明した方がいいかしら？」

「是非、お願い」

京水の言葉に、マリアは自分の机に行ってファイルと一つ取りだした。そして、ページをめくると、該当のページを開き、それを手元に置いたままパソコンに向かった。その姿を見た京水は、よろしくね、と言ってマリアの作業の邪魔にならないように彼女の部屋から出ていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2000ba/>

Memories

2012年1月8日01時55分発行